

「キリスト教センター」名称変更記念礼拝メッセージ

2013年4月1日（月）12:30-13:00

「イエス・キリストの名によって」

聖書箇所「使徒言行録4：10－12、（使徒言行録3：6）」

4:10 あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。4:11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

「名は体を現す」

今日、私たちが、こうして礼拝を捧げているのは、チャペル活動の拠点であるセンターの名称を、本日より「宗教センター」から「キリスト教センター」に変更することを記念して、であります。単に名前を変えるだけのことようにも思えますが、「名は体を現す」と申しますように、名前はそれが指し示すものの本質に関わると言われます。その変更ということになると、私たちが意図していること、意識しているもの以上の大きな意味を持つてくることになるのではないのでしょうか。

今日、キリスト教センターへの名称変更にあたり、キリストの御名に関して、三つのことを覚えながらお話ししたいと思います。

1つは、本学院がキリストの御名によって建てられた学院であること。キリスト教センターは、それを思い起こさせ、告げ知らせる役目を負っているであろうということ。これは宣教にかかわることでもあります。

2つ目、キリスト教センターは、人々にキリストの名によって助け、仕えていく働きをめざすべきであろうということ。これは奉仕にかかわることでもあります。

3つ目、キリストの御名に栄光を帰すということ、これは礼拝にかかわることでもあります。

しかしまずは、今まで用いて来た宗教センターという名称について少し振り返りたいと思います。

「何故、宗教センターという名称だったのか？」

ミッション・スクールにおける、礼拝などの宗教的活動を担っている部署の名称について、他の聖公会関係学校で見えますと、立教学院がチャペルまたチャプレン室という部署・組織名を用いている以外は、立教女学院、香蘭女学校、柳城学院、平安女学院、桃山

学院、プール学院、神戸国際大学と、みなまるで判で押したかのように「キリスト教センター」という名称を用いています。そうしますと、神戸松蔭女子学院大学が長く、「宗教センター」という名称を用いてきたということが、むしろ特殊であったとも言えます。

では松蔭では、何故「宗教センター」という名称を用いていたのでしょうか？このセンターでキリスト教に限らず、諸宗教にかかわる活動が行われていたわけではありません。これは私の想像ですが、ミッション・スクールの宗教なのだから、キリスト教であることは推して知るべしということにとどめて、「キリスト教」ということを明確に打ち出すことを敢えて避けようとしていたのではないかと思います。

しかしそれを頭から否定すべき態度とは言えないとも思っています。ミッション・スクールと申しても、入学する学生でクリスチャンは僅かです。多くのキリスト教を知らない学生に、いきなり「キリスト教」という主張をすることは、拒絶反応を生み、また他の宗教的背景を持つ者の排除に繋がる可能性もあります。それを避けるため「宗教」という一般的な名称を用いて敷居を下げようとしたのかも知れません。120年前の松蔭女学校創立に当っても、敢えて「松蔭」という日本的な名称を選んだとも言われていますが、そうした姿勢の背後には、キリスト教以外の宗教や信仰、また文化に対する「配慮」があるとも言えます。しかし一方で、その配慮が「わかりにくさ」、またミッション・スクールとしての建学の精神のもとに活動していくにあたっての主張の弱さになっていることを反省して今回の名称変更に至ったと理解しています。

1 「御名によって建てられた学院」(宣教)

今回の名称変更は、「宗教」一般という、言わば一種の匿名行動を脱して、「キリスト教」という、ミッション・スクールとしての立場を明確にして活動して行こうとする、「キリストの名の復権」とも言うべき意味を持つと思います。それはこの神戸松蔭女子学院大学としての「信仰告白」と言ってもよいのではないのでしょうか。

この「キリストの名」ということで、先ほど読んで頂いた「使徒言行録4:10～12」を見て参りますと、12節に「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」とありました。この言葉の内には、「イエス・キリストの名」によってこそ救われると言う、まるで隠されていた宝を発見したような、溢れるような喜びが込められています。そしてその喜びを全ての人々の救いのために、何としてでも伝えて行きたいという熱い思いが、その後の使徒たちの世界宣教の原動力ともなるものです。そしてそれは今から120年前に、この学院を創立したフォス監督をはじめとして、遠い異国であった筈のこの日本での宣教に人生をかけた宣教師たちにも受け継がれていった信仰と情熱であります。

何故「イエス・キリストこそが私たちが救われるべき名」なのか、それはそこに真実があり、また愛の教えが示され、十字架と復活による神の国、永遠の命の約束のメッセージが込められているからです。

まずは「キリスト教センター」名称変更にあたって、本学院がそうした「この名にこそ、救いがある」という信仰と情熱に突き動かされた宣教師たちにより、「キリストの御名によって建てられた」ことを改めて思い起こし、創立者の建学の精神を探り、継承しながら、「キリストの名」を告げ知らせていく決意を新たにしたいと思います。

2 「御名によって立ち上がらせる」(奉仕)

またこの使徒言行録4：10以下のペトロの言葉は、彼がエルサレム神殿で、足の不自由な男を癒す奇跡を行い、その行動を問題視したユダヤ教指導者に捕えられた時に、審判の席で証言した言葉でした。その奇跡を行った時にペトロが語っていた言葉は、次のようなものでした。使徒言行録3：6「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。ペトロは、イエス・キリストの名によって、足の不自由な男を、立ち上がらせ、歩かせました。この奇跡は肉体的ハンディキャップの癒しだけを語るものではありません。この奇跡を比喻としながら、「イエス・キリストの名」は、人間が自立し、喜びをもって自らの人生を歩ませる力を秘めているということです。そして今日、今一度新たに「キリストの名」を冠せられる、このセンターの活動も、学生たち、また教職員の方々や、すべての学院関係者に対して、彼らが「立ち上がり、歩いていく」ための助けになるような活動を目指して参りたいものです。

3 「御名の栄光のために」(礼拝)

「キリスト教センター」とは、キリストの名に栄光を帰すということについて、それは私達自身の誉れを求めるのではないということです。その一番の営みが礼拝であります。すべての活動において、今、改めて「キリスト」の名をセンターに冠せようとしている時、それがキリストの名を私たちの目的のために利用しようとしていることはないか、わたしたちが「主の名をみだりに唱えるなかれ」という十戒の第3戒を犯していることはないかを振り返り、今一度、謙虚になって、チャペル活動やセンターの活動に向かいたいと思います。

キリスト教センターへの名称変更は、私たちが発案し、私たちの意図で行われているように見えます。しかしこれは、「生きて働いておられる主」が、この時に、私たちを用いて、このような運びに置かれたからこそその結果だと私は信じています。丁度、復活日の翌日、そして新しい学年度初日に、この名称変更を行い、その記念の礼拝をささげる機会が与えられていることも、主が備えてくださった故の奇しき恵みと感謝したいと思います。

本日より、「キリスト教センター」として活動していく営みのすべて、主の恵みと祝福が与えられ、このセンターがさらに主の御名の栄光を現す器として用いられて参りますよう、お祈りしたいと思います。